——故望月歓厚先生追悼にかえて——

「望月宗学」の後に来るもの

望月歓厚先生の死は、何といっても寂しい限りであり、宗門の一大損失である。終生、宗政の局に携わらず、専ら、学徒育英と宗学研究に身を委ねられた人格の高潔性は、亡くなられてから、益々その認識を深めさせた。

宗門近世の宗学は、何びともが認めるように、加州の堯山和上によって大成されたが、その系譜に立ちつつ、いわゆる近代宗学を樹立したのは、要麟浅井先生と歓厚望月先生の双璧である。しかも両者轡を並べて輩出し、片や文献学的方向に、片や論理学的方向に、それぞれその特色を発揮したのは、まことに奇しき因縁といわざるを得ない。そして前者の主著を「日蓮聖人教学の研究」といい、後者の主著を「日蓮教学の研究」というも、亦奇なるかなである。

この書名によっても推察されるように、浅井先生の宗学は、宗祖聖人の教学の文献学的方法による考究であり、望月先生の宗学は、宗祖を源流とする一宗教学の体系的考究である。望月先生は、口癖のように「ボクは浅井君と方法を異にしていた」といわれた。たしかに、浅井先生は、宗祖遺文の文献学的批判から入って、聖人の教学の真にオリヂナルなものを求めようとした、一種の復古主義であったが、望月先生は、宗祖を先達と仰ぐ信仰的伝統のなかに、歴史的に創造されていく宗学を目指しておられたようである。したがって、宗祖の思想を追求するに当っても、文献批判は浅井先生ほど神経質ではなく、たとい、第二資料と目されるものでも、宗祖の本質的立場から可能性ありと認められれば、用いるに吝かでないという態度を執られた。しかも、論及はきわめて客観的で、形式的に分類されることに妙を得ておられた。先生自身は創造宗学

ということを旗幟とされ、宗祖は正しい意味の創造宗学を樹てられた方であるから宗祖の宗学から根本仏教へ遡源することはできても、根本仏教から宗祖への途は連続していない。ともいっておられた。その意味においては、先生は歴史主義的創造宗学者であったというべきであろう。

ただ、ここで疑問となることは、先生が認識された宗祖の本質的立場なるものは、如何なる立場においてそれが為されたか、ということである。もちろん、遺文の信仰的把握が根本条件であったことはいうまでもないが、宗祖のオリヂナルな宗教体験を捉える場合、祖滅後の宗学が能く媒介契機をなすだろうか、ということである。先哲学匠の宗学的業績は、何れも宗祖の宗教的世界を追求し、追体験しようとの努力の結晶ではあるが、それは個々の先師の創造的世界であって、宗祖の宗教的世界そのものではない。したがって、示唆となり、目安となり、鍵となることはあっても、日蓮的認識による日蓮認識とはならない。先生はその点をどう処理されたのであろうか。この点は、先生の宗祖観ともつながりを持つのである。（今秋出版の予定である先生の宗学史に関する論稿は、これに応えられるかも知れない）

さらに、麤を得て蜀を望むことが許されるなら、先生は創造宗学を標榜されながらも、論文の傾向は、いささか仏教学的方法に拘泥されていた嫌がなかったろうか、という疑問である。純粋な宗学として、日蓮的認識による日蓮認識の立場は、も早、所謂仏教学的方法を必要としないのである。それは現代の仏教学が無用だということではない。そういう立場でさえも、さらに問い返される立場に置き換えられるものだというのである。とにかく、先生の論文の傾向は、客観主義的形式に拘泥されていたように思う。

今後の宗学は、さらに百尺竿頭一歩を進め、日蓮的認識とはいかなるものであるか、また、それはいかにして可能であるかが問われなければならないであろう。それにしても、望月先生の宗学を基礎とし、それを踏まえたうえに、楼は重ねられるものでなければならないのである。

現代宗教研究所々長　茂田井教亨